

しんまちの のぎ
新町野・野木遺跡

発掘調査概報

平成10年度

青森市教育委員会

序

青森市は、本年度市制施行百周年を迎え、さまざまな分野でのより一層の発展がますます期待されています。

青森市教育委員会では、昨年度、市内野木に所在いたします野木遺跡について青森県埋蔵文化財調査センターと合同で発掘調査を実施いたしました。

今年度もまた、青森中核工業団地造成事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を新町野遺跡、野木遺跡について実施いたしました。

調査の結果、新町野遺跡は、本市において類例の少ない平安時代の円形周溝がまとまった形で見つかり、また、野木遺跡については、平安時代の鉄生産の炉跡が見つかり、当時における人々の生活の営みを窺い知ることができました。

本書は、昨年度刊行いたしました野木遺跡概報と同様に研究者はもとより、市民の皆様により親しみやすい写真図版等を盛り込んだ発掘調査概報として刊行することにいたしました。

本書が埋蔵文化財の保護・活用、地域の歴史学習等に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である地域振興整備公団のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成 11 年 3 月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、青森市教育委員会が平成 10 年度実施した青森中核工業団地造成工事に係る新町野遺跡、野木遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 両遺跡の遺跡番号は、新町野遺跡が 01161、野木遺跡が 01210 である。
3. 本書で報告する遺跡は、地域振興整備公団の委託を受けて青森市教育委員会が平成 10 年度に発掘調査を実施した部分についてのものである。
4. 本書は、発掘調査の概要報告書であり、調査全体の報告については、新町野遺跡については平成 11 年度に、野木遺跡については、平成 11・12 年度の 2 年次にわたって刊行する予定である。
5. 本書の執筆は、新町野遺跡については、調査担当者である北林八洲晴、野木遺跡については、調査担当者である木村淳一、設楽政健が分担しておこなった。
6. 発掘調査の実施、ならびに本報告書の刊行にあたって次の機関からご指導・ご協力をいただいた。
青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会。

目 次

はじめに	1
新町野遺跡とは	2
野木遺跡とは	3
今年度の調査から（新町野遺跡）.....	4
遺構・遺物遺構からみた人々の生活（新町野遺跡）	6
今年度の調査から（野木遺跡）.....	9
遺構からみた人々の生活（野木遺跡）...10 〔コラム〕～野木遺跡での平安時代以前の人々の暮らし～	13
遺跡からみた人々の生活	14
まとめ	16

はじめに

青森県商工労働部は、青森県における産業構造の高度化ならびに人口定住の促進を図るために青森テクノポリス開発計画を計画し、産業振興の拠点として、地域振興整備公団と県との共同事業による青森中核工業団地を青森市大字野木・合子沢地区に造成を計画しました。

開発予定地の中には、平成5年・6年度に青森県教育委員会によって実施された分布調査で範囲の拡張がされた新町野遺跡、平成5年度に新しく発見され縄文時代と平安時代の遺跡として登録された野木遺跡が所在することがわかりました。

平成7年度から青森県埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施して、約17万5千m²が調査対象範囲となり、翌平成8年度からは、試掘調査の結果を基に最優先部分について青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施しました。

平成9年4月に、当初調査終了予定が平成11年度でしたが、地域振興整備公団並びに県工業振興課の要望により平成10年度終了に変更となり、その協議の段階で青森市教育委員会が加わり、新町野遺跡の幹線及び補助幹線道路部分と野木遺跡南側の遺構密集地区ならびに西側部分の試掘・本調査を青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当し、野木遺跡の北側幹線道路部分を青森市教育委員会が調査を担当することになりました。

青森市教育委員会では、埋蔵文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るため、調査を受託し、平成9年度は、野木遺跡の北側幹線道路部分を中心に約24,000m²について発掘調査を実施しました。

平成10年度は、新町野・野木遺跡の両遺跡を発掘対象とし、野木遺跡については、平成10年4月20日から11月6日、新町野遺跡については、7月1日から11月20日までの調査期間で発掘調査を実施しました。

本書では、青森市教育委員会が平成10年度に実施した新町野・野木遺跡の発掘調査の概要について報告します。



野木遺跡調査区遠景

新町野遺跡とは

新町野^{しんまちの}遺跡は、青森市の中心部から南へ約7kmのところにある低丘陵地に位置して、青森市大字^{ごうしざわ}合子沢字松森^{まつもり}にあります。低丘陵地の標高は約20～40mで、近くには青森市斎場があります。また、近くを荒川の支流である牛館川^{うしだてがわ}と合子沢川^{ごうしざわがわ}が流れています。

本遺跡の南方約1kmには、平安時代の大集落である野木遺跡があります。野木遺跡の南側には、山口遺跡と呼ばれる野木遺跡よりも広大な遺跡が確認されています。また、牛館川を隔てた隣の丘陵上には、葛野^{くずの}(2)遺跡があります。平成8年度と平成10年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施しています。

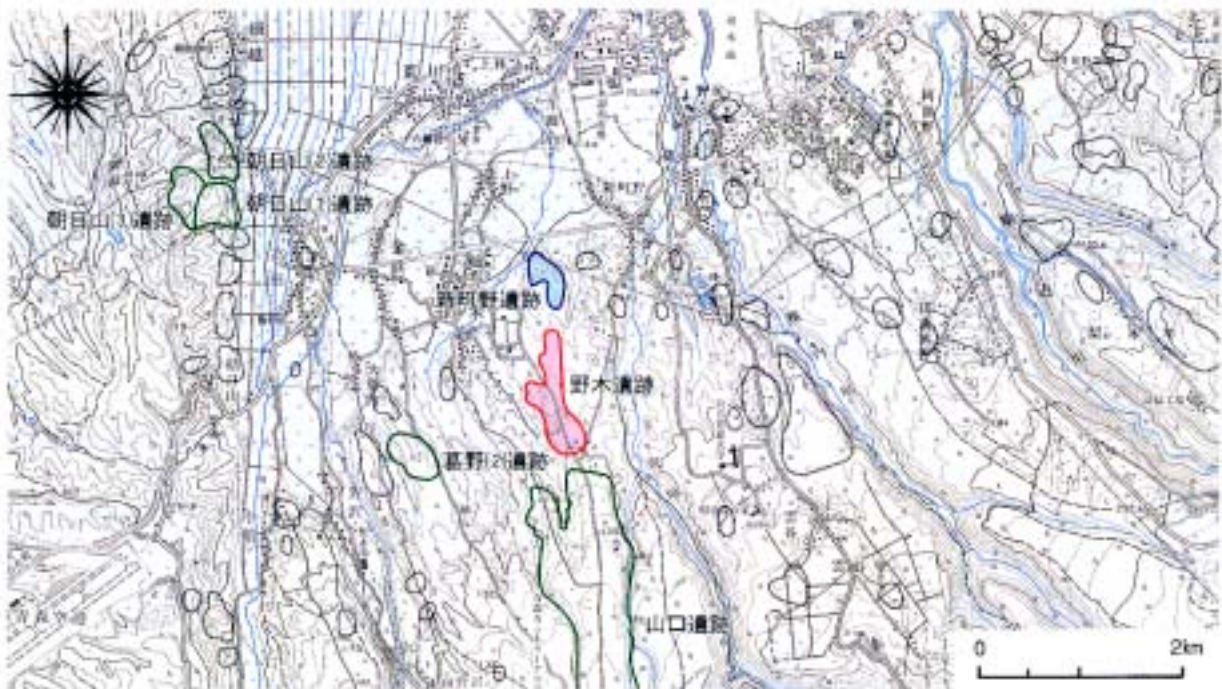
新町野遺跡は、昭和54年8月22日に市内では161番目の遺跡として登録されました。その後、平成5年に青森県教育委員会が実施した県内遺跡詳細分布調査において、その遺跡範囲が拡大されました。

平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センターが試掘調査して、縄文時代と平安時代の集落遺跡であることが分かりました。

本遺跡の本格的発掘調査は、平成8年度から青森県埋蔵文化財調査センターによって平成9年度まで実施されています。

青森市教育委員会では、平成8年度には今年度の調査区域の北西にあたる地区の試掘調査を、平成9年度には東側の一部について道路事業に先立つ発掘調査を実施しました。

このような調査を経て、平成10年度の発掘調査が実施されました。なお、今年度も隣接する調査対象区域を青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施しています。



新町野・野木遺跡と周辺の遺跡位置図

野木遺跡とは

野木遺跡は、青森市の中心部から約8km離れた青森市大字野木字山口^{のぎ やまぐち}にあります。遺跡の立地は、青森市南部にそびえ立つ八甲田山からのびる火山性の台地上標高50m～90mにあります。本遺跡の北方約1kmには、新町野遺跡があります。

この遺跡は、平成5年度に青森県教育委員会が実施した分布調査によって、市内では210番目の遺跡として登録されました。

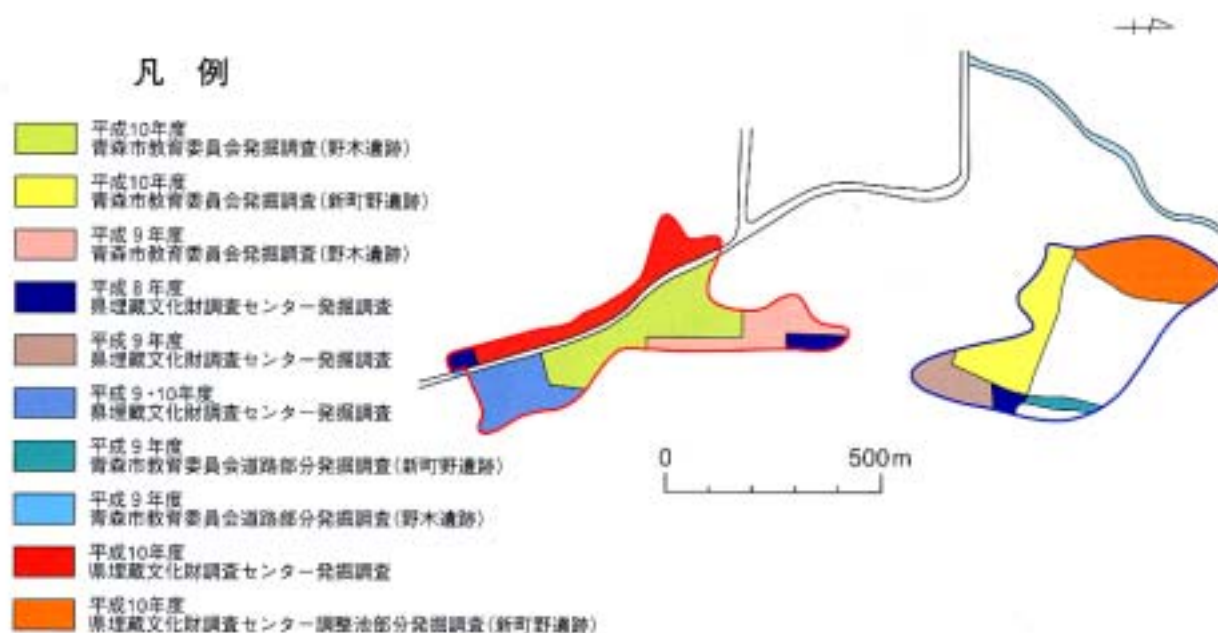
その後、平成7年度からの青森県埋蔵文化財調査センターによる中核工業団地整備事業に係る試掘調査によって、縄文時代と平安時代の竪穴式住居跡や土坑等の遺構、縄文時代と平安時代の土器などの遺物が見つかっています。

野木遺跡の発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターによって平成8年度から実施されており、青森市教育委員会は、平成9年度から青森県埋蔵文化財調査センターと合同で発掘調査を実施しています。遺跡は、北側の地区について青森市教育委員会が、南側の地区と西側の地区について青森県埋蔵文化財調査センターが担当しました。それぞれの地区は、調査担当は異なりますが、見つかった遺構や遺物から各地区とも平安時代にはほぼ同じ時期に集落が営まれています。

昨年度は、北側の地区の最北端から青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施している地区に向かって発掘調査を実施し、調査の結果、平安時代の竪穴式住居跡85軒、竪穴遺構30基、土坑140基をはじめとする遺構が見つかり、平安時代の土器を中心とした遺物が段ボール約110箱分見つかりました。

昨年度の調査時点で、青森市教育委員会の担当した地区については、南側の青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した地区に比べて、同じ場所に何度も住居を建て替えるようなことが少なく、広大な土地を利用した様子を窺い知ることができました。また、鉄を作る際にでた屑である鉄滓^{てつさい}や、鉄を作る際に送風管としている羽口^{はぐち}が大量に出土していることから、集落内で鉄生産に関連した炉跡が見つかる可能性が予測されました。

今年度は、昨年度調査を実施した地区からさらに青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施している南側の地区に向かって調査を実施しました。

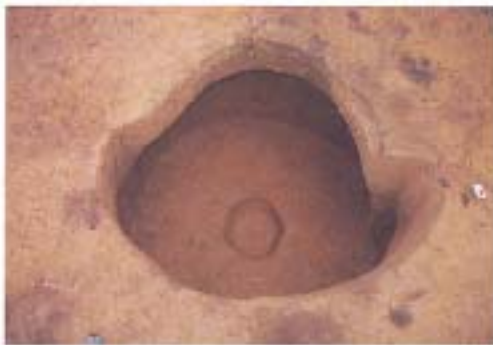


新町野・野木遺跡調査対象範囲

今年度の調査から（新田野遺跡）

青森市教育委員会で実施した新田野遺跡の発掘調査は、約23,800m²について、平成10年7月1日から同年11月20日まで実施しました。

調査の結果、竪穴式住居跡24軒（縄文時代1軒、平安時代23軒）、円形周溝（墓）11基、土坑69基、小ピット14基、縄文時代の^{おと}陥し穴13基、道路状遺構2条、溝状遺構4条が見つかりました。また、平安時代の土器を中心とした遺物は、段ボール箱で約10箱分出土しました。



縄文時代の食料貯蔵用穴



縄文時代の陥し穴



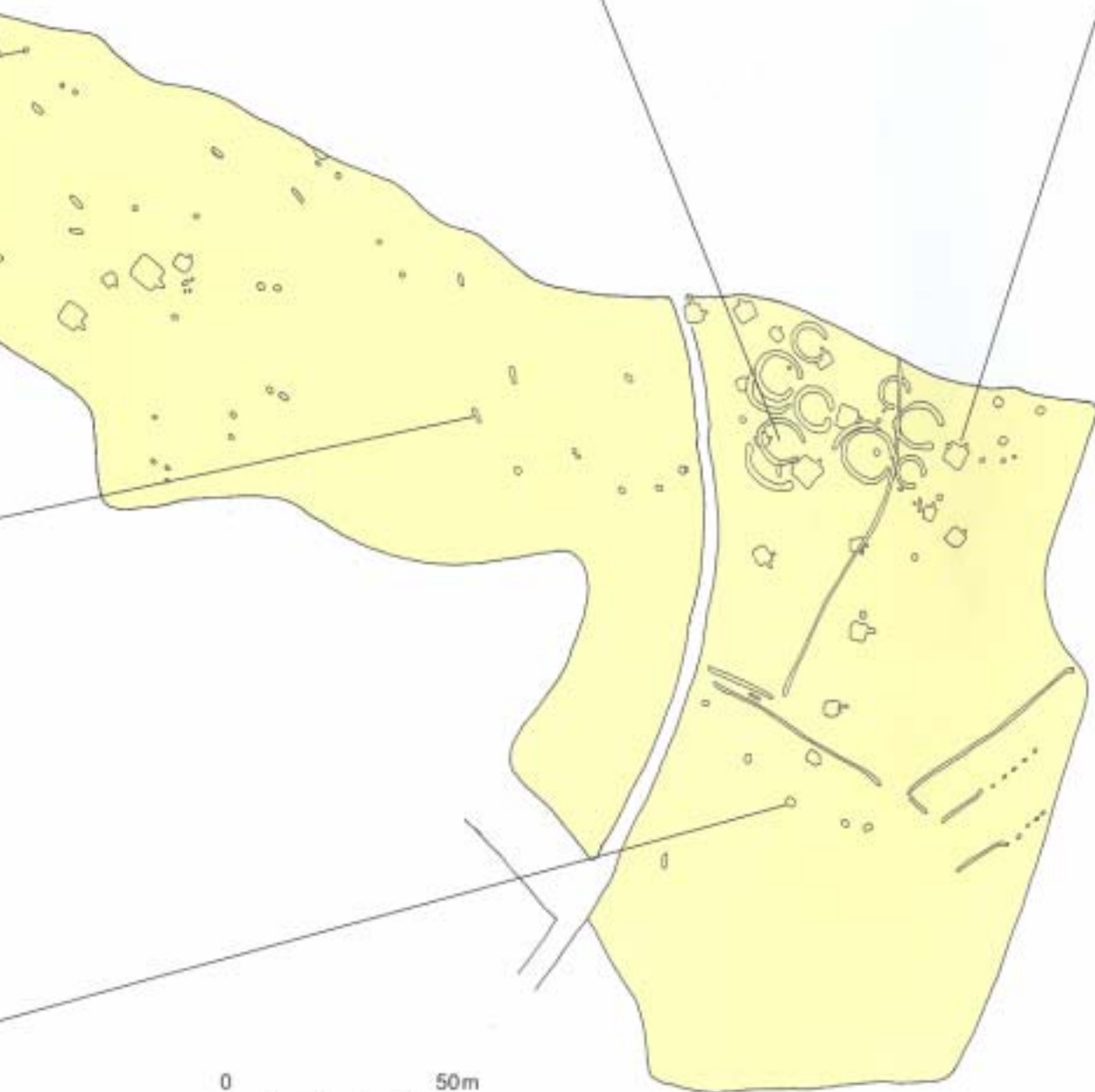
平安時代の壁面・底面が赤く焼けた土坑



平安時代の盛土のある円形周溝



平安時代の火災で焼失した竪穴式住居



0 50m

遺構・遺物からみた人々の生活（新町野遺跡）

円形周溝

新町野遺跡の発掘調査において、竪穴式住居跡、土坑などの遺構と共に平安時代の埋葬施設の一つではないかと考えられる^{えんけいしゅうこう}円形周溝が見つっています。

新町野遺跡から発見された円形周溝は、遺構の外郭を円形状に溝を掘って、溝から出た土を溝の内側（内郭）に円墳状に盛り上げたものです。円形状の溝が途切れたところを開口部と呼んでいます。この位置は、ほぼ南東の方向にあります。また、円形周溝と別個の弧状をした溝を付け加えて、周溝を拡張し、円形周溝自体を造り直したものがあります（2・5・7号）。これらの円形周溝群は、古い竪穴式住居跡を壊して造られたものが多く、円形周溝同士が重複した例はありません。円形周溝群は、遺跡の中でも見晴らしのよい丘陵頂部付近から見つかりました。



円形周溝（1・2・6・7・9号、北）

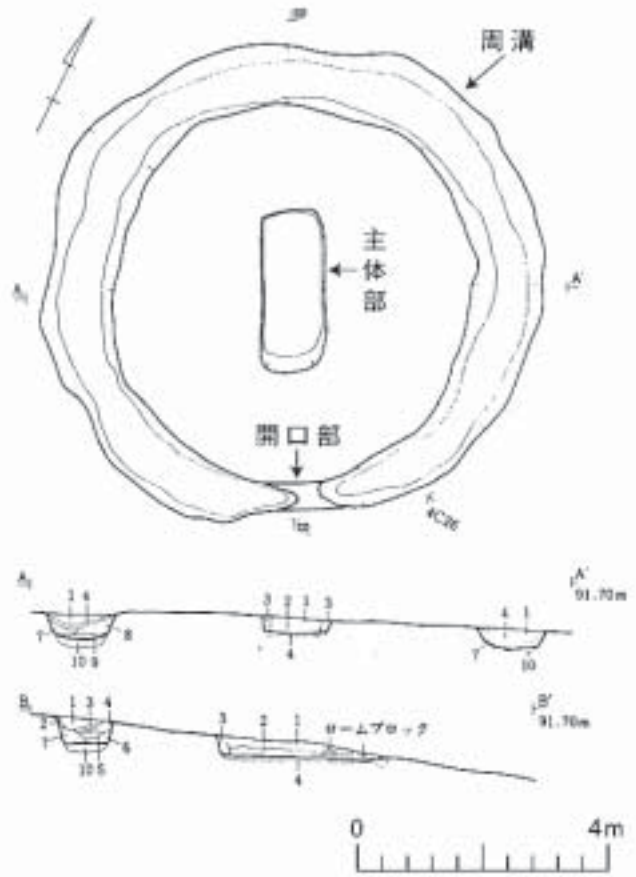
このような遺構は、昭和49年（1974）ごろから県内で見つかり始めて、円形周溝、方形周溝、環状溝、環状遺構などと呼称されてきました。

青森市内では、これまで^{ちかの}近野遺跡、^{さんないさわべ}三内澤部遺跡、三内丸山(2)遺跡から4基見つっています。県内では、今日まで30遺跡から250基ほど確認されていましたが、近年まで遺構の性格を十分把握できる手掛りの少ない遺構でした。

特に円墳状の墳丘と埋葬施設である主体部が不明な円形周溝が、7世紀後半～8世紀初頭の終末期古墳である八戸市^{かしまさわ}鹿島沢古墳群、同市^{たんごたい}丹後平古墳群、下田町^{あこうぼう}阿光坊古墳などの系統と結び付くのかどうかの資料、情報を得るまでには相当の時間が必要でした。

平成元年（1989）に下田町^{なかのたい}中野平遺跡から出土した円形周溝の1基について、リン及び脂肪酸の化学分析を実施したところ、周溝内平場の中央から西側にかけての個所から、頭部を西に向けた形で遺体を埋葬していた可能性が大きいという分析結果が出ました。これによって円形周溝は古墳ではないかと報告されました。これまで県内各地で見つかった円形周溝とか環状溝などと名付けられた遺構は、奈良・平安時代の墳墓の一つである可能性に一步近付いたことになります。

そして、平成2、3年には三沢市^{ひらはた}平畑遺跡発掘調査で、円墳状のマウンド（盛土）と周溝がはっきり残存した円形周溝が見つかっています。これには2種類の降下火山灰が堆積しています。10世紀初頭に噴火したといわれている^{はくとうさん}白頭山 - ^{とまこまい}苦小牧（北朝鮮）火山灰と十和田a火山灰であるとの専門家による分析から、ここの円形周溝は、終末期古墳の形態を良好に継承した平安時代の遺構と判断されました。その後、同様なことが八戸市^{とのみ}殿見遺跡、三沢市平畑(5)遺跡で確認されています。



円形周溝参考図（丹後平古墳23号より引用）

本遺跡の円形周溝は、平成8年に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した試掘調査で6基（本年度の1～6号）確認されていましたが、盛土、主体部については、未調査でした。

本概報を執筆する段階では詳細なデータが揃っていないので中間的な報告(概報)の形になりますが、本遺跡の円形周溝群には、終末期古墳で埋葬施設（主体部・土壇）が造られた位置からは主体部は見つかりませんでした。しかし、盛土の下地山から長方形や円形の土坑、



円形周溝を掘り下げた土坑



盛土下部から出た土坑

周溝を掘り下げてつくられた隅丸長方形の土坑などが見つかっていて、これらの土坑や周溝から底部に穴をあけた坏形土師器やばらばらに壊した内黒土器、鉄器が出土しています。これらは、埋葬の儀式に関係がある遺物と考えられます。

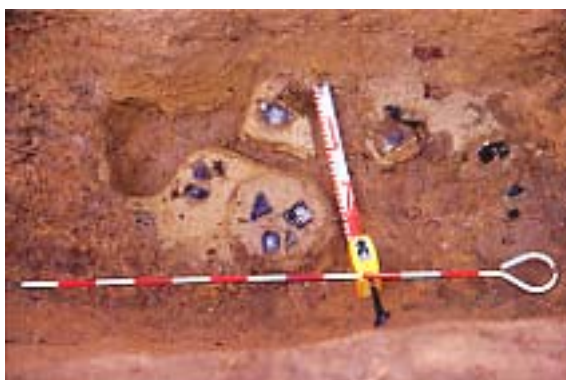
周溝の大きさは、外径7～15.5m、幅0.4～1.0m、深さ0.2～1.1m、盛土の高さ0.1～0.3mほどです。円形周溝の溝には、白頭山 - 苦小牧火山灰が自然堆積していましたが、周溝を造る際に十和田 a 火山灰の堆積していた竪穴式住居跡(5、6、14、15、16号)を壊しています。これらのことから、本遺跡から発見された円形周溝の年代が推定されるものと考えられます。円形周溝が平安時代のお墓の一つだとすれば、何処に住んでいた人たちが埋葬されたのか注目されます。今後、主体部が残った円形周溝が発見されることを期待したいものです。



底部に穴をあけた土器の出土状況



周溝から見つかった坏形土器



周溝底面から見つかった坏形土器片



周溝と竪穴式住居跡の重複部から見つかった土器



円形周溝から見つかった底部穿孔土器

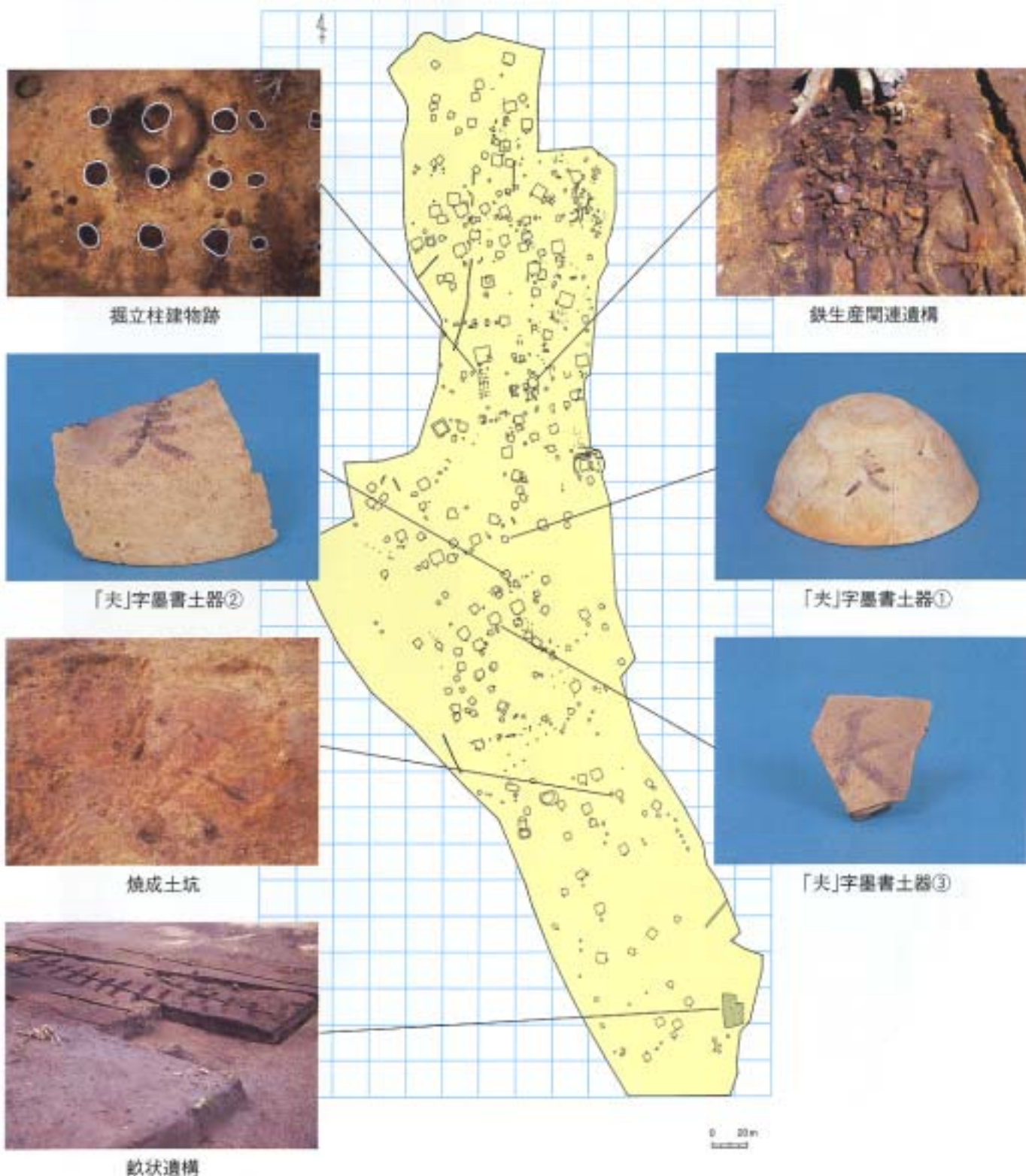


円形周溝から見つかった土器

今年度の調査から（野木遺跡）

青森市教育委員会で実施した野木遺跡の発掘調査は、昨年度の発掘調査に引き続き約45,900m²について、平成10年4月20日から同年11月6日まで実施しました。

調査の結果、平安時代を中心とする竪穴式住居跡114軒、竪穴遺構14基、土坑171基、鉄生産関連遺構5基などの遺構が見つかりました。また、平安時代の土器を中心とした遺物は、段ボール箱で約140箱出土しました。



遺構からみた人々の生活（野木遺跡）

製鉄関連遺構

昨年度の調査では、竪穴式住居跡や土坑から鉄製品や鉄滓、炉壁片と思われる遺物が出土したほか、鉄滓を大量に捨てた土坑や住居が廃絶した後に鉄滓を大量に捨てている例が見つかったことから、鉄生産に関連する炉が見つかることが想定されました。今年度の発掘調査では、想定したとおり、焼失した竪穴式住居の床面を利用して2基、そこから10mほど離れた竪穴式住居のカマドの煙道を利用して2基、計4基の炉跡が見つかりました。2軒の住居は、同じ時期には存在していなかったと考えられます。

焼失した住居の床面を利用してつくられていた2基の炉は、住居の中央に1基、北東隅に1基つくられていました。焼失した住居の場合、上屋の部材が焼け落ちて、床面に炭化物が広がりますが、炉はその焼失した住居の炭化物の上に構築されていました。遺構の確認段階でかなり削平を受け、また1基の炉については中央部が木の根によって破壊されているため、炉の上部、下部ともに詳しい構造をつかむことはできませんでしたが、炉床部と思われる青灰色に還元された土、炉壁片と思われる遺物や鉄滓の広がりが確認できました。もう一方の住居で見つかった2基の炉は、住居のカマドの煙道上部に1基、その東隣にもう1基つくられていました。この2基の炉も、遺構の確認段階でかなり削平を受けていたため、上部の詳しい構造を知ることはできませんでしたが、カマドの煙道の上につくられていた炉については、比較的残りが良く、下部の構造を知ることができました。炉壁片や鉄滓を取り除くと炭が混じった鉄滓によって、平面が直径約30cmの楕円形状の底（炉床部）が形成されていました。その下部には、青灰色の砂質粘土が椀状に形作られていました。また、さらにその下部には同じような構造が形成されていたことから、作り替えが行われていたことが考えられます。流れ出て固まった鉄滓が主に炉の北側に広がっていたことや、炉床部が南から北に傾いていたことから、炉の操業に係わる作業場を北側にもつ炉であったと考えられます。

もう一方の炉は、下部まで削平を受けていたため、構造はわかりません。



鉄滓が炉壁片が捨てられた土坑



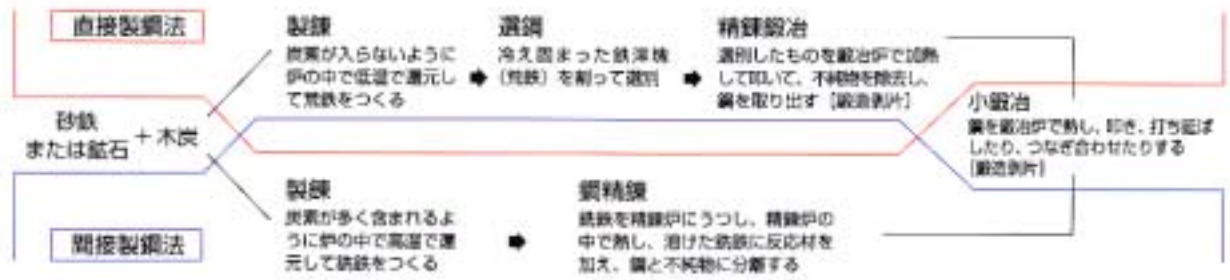
炉跡



炉跡



炉跡 の炉床部



古代の鉄作りの方法は、^{ちよくせつせいこうほう}直接製鋼法と^{かんせつせいこうほう}間接製鋼法という二つが考えられています。直接製鋼法とは、砂鉄または鉄鉱石を木炭とともに製錬炉の中で低い温度で還元し、小さな鉄塊が混じった大きな鉄滓塊をつくり、それを割って選び出し（^{せんこう}選鋼）それを精錬鍛冶炉で加熱してたたくことで不純物を取り除き（^{せいれんかじろ}精錬鍛冶）鋼を取り出す方法のことをいいます。間接製鋼法とは、砂鉄または鉄鉱石を木炭を用いて製錬炉の中で高い温度で還元し、炭素が多く含まれた鉄（^{せんてつ}銑鉄）をつくり、溶けた銑鉄を精錬炉で、^{あく}灰汁、砂鉄を加えて反応させて、鋼と不純物に分離させる方法のことをいいます。そしてどちらの方法で取り出された鋼も、製品にするために炉（^{こかじろ}小鍛冶炉）で加熱してたたいて、鉄をつなぎ合わせたり、打ち延ばしたりして製品をつくる作業が行われます。

野木遺跡から見つかった炉はどちらの製造法のどの段階に係わる炉なのでしょう。現在のところ、はっきりと判断を下せませんが、この問題を考える上では、炉の構造はもちろん、鉄づくりに関連する遺物が手掛かりになります。それらの遺物には、鉄滓、^{たんぞうはくへん}鍛造剥片、炉壁片、羽口があります。とくに鉄滓は、いろいろな種類があり、鉄づくりの各段階によって排出される鉄滓の成分が異なることから、分析によって、何を原料とし、どの段階で排出されたものかを推定することができます。

野木遺跡から見つかった炉は、削平を受けているため、炉の全体構造を判断することは困難ですが、これらの遺物を調べることで、本遺跡で見つかった炉がどのような工程で使われたのかを想定する上で非常に重要な手掛かりをつかむことができます。



鍛造剥片



炉壁片

竪穴式住居跡・掘立柱建物

昨年度の調査に引き続いて今年度、野木遺跡の調査では、たくさんの竪穴式住居跡が見つかりました。

青森市教育委員会が調査を実施した地区では、一辺が4～5mの竪穴式住居跡がほとんどで、また、同じ場所を利用して建て替えることはほとんどなく、建て替える場合、隣の空いている土地に新たに住居を建てる例が多く見られます。

昨年度の調査区から連続する標高50m付近の斜面の頂部からは、北側の調査区の中で最大級の竪穴式住居跡が見つかりました。一辺が約8mで平均的な竪穴式住居跡に比べると2倍近い広さを持っています。竪穴式住居跡の隣には、^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡が見つっています。柱と柱の間をそろえ、2間×2間の間隔で、中央部には、^{むなもちばしら}棟を支える棟持柱をすえています。棟持柱を持つ掘立柱建物跡は、倉庫としての役割が考えられることから、竪穴式住居跡との関連が想定されます。



北側地区最大級の竪穴式住居跡



掘立柱建物跡

土 坑

昨年度の調査で見つかった土器作りのための窯として利用されたと想定される^{しょうせいどこう}焼成土坑が今年度の調査でも見つっています。今年度の調査では、竪穴式住居を使い終わった後、その土地を再利用して、焼成土坑を作っている例なども確認されました。昨年度、青森市教育委員会と青森県埋蔵文化財調査センターが調査した地区から見つかったロクロピット、ならびに今年度青森県埋蔵文化財調査センターが調査した地区から見つかったロクロの回転盤などから、野木遺跡の中で当時の人々が土器作りを行っていた事実が一層はつきりしてきました。



焼成土坑



青森県埋蔵文化財調査センター地区から見つかったロクロ回転盤

畝状遺構

今年度の発掘調査では、何らかの作物を栽培していた畝と考えられる遺構（畝状遺構）を約90m²の範囲で確認できました。断面の土層を観察すると、畝の上部はなくなっており、畝の下部と畝間が確認できました。畝は黒い土で作られ、畝間にはやや灰色がかった土が入り入りこんで

いました。どういものが栽培されていたのか調べるため、畝から採取した土を分析を行っています。

このような畑の跡は、南側の青森県埋蔵文化財調査センターが調査した地区からも見つかっています。



畝状遺構



畝状遺構の堆積状況

コラム～野木遺跡での平安時代以前の人々の暮らし～

たくさんの竪穴式住居跡や土坑をはじめ、製鉄炉や畠跡などが見つかり、平安時代の大集落をイメージさせる野木遺跡には、縄文時代の人々も生活していたようです。平安時代の数ほどではありませんが、縄文時代前期末の竪穴式住居跡7基、フラスコ状土坑13基が見つかり、これらの遺構は局所的に分布しています。一軒の竪穴式住居跡と重複して、フラスコ状土坑が見つかり、その上面には土器がたくさん捨てられていました。そのたくさんの土器に混じって、砕けた琥珀や石器なども見つかり、使われなくなってほとんど埋まったフラスコ状土坑の上部を利用して、捨て場としていたと考えられます。

野木遺跡の北に隣接する新町野遺跡の北側では、縄文時代前期末の大型竪穴式住居跡が見つかり、野木遺跡と同じ時期の集落が営まれていたことが想定でき、両者の集落の関連性が考えられます。



縄文時代の竪穴式住居跡



縄文時代の土器

遺物からみた人々の生活

土 器

今年度の発掘調査から見つかった土器は、昨年度
の発掘調査で見つかったものと同じ平安時代中期の
ものが中心です。主に土師器^{はじき}が中心で、食事をする
際に利用された椀や皿、料理を作る際に使われた甕
や鍋^{なべ}などです。土師器については、遺跡内で作った
ものや他の集落から運ばれてきたものを使っていた
ようです。この他、須恵器と呼ばれる灰色の陶器
が見つっています。

土師器に比べて須恵器の出土量は、全体の1割位
ですが、主に食事をする際に利用された坏と皿と貯
蔵用の甕や壺が主に見つかり、中には、土器
を作った人の印としてのヘラ記号^{こくしよ}(刻書)がつけら
れたものも見つっています。

野木遺跡から見つっている須恵器については、
ほとんどが現在の五所川原市にある窯で作られた製
品が入っているようです。

須恵器のヘラ記号は土器を作った人がつけたもの
ですが、土器を使う人が墨を使って文字や記号を記
入した例があります。

これらの土器は墨書土器^{ぼくしよどき}と呼ばれ、昨年度の調査
でも見つっていましたが、今年度の調査からも新
たな資料が見つっています。

今年度新たに見つかった墨書は、「夫」と銘記され
た字で、この文字は従来の説で「夷」と読む解釈が
なされていますが違う説もあります。「夷」と解釈し
た場合、蝦夷^{えみし}の意味を含む可能性があります。



野木遺跡から見つかった土師器



食器として用いられた椀、皿



煮炊きに使われた甕



「夫」と書かれた墨書土器



五所川原産の須恵器

土製品

粘土でつくった製品を土製品といいますが、野木遺跡から見つかったものには土製玉類、羽口、支脚、用途不明の土製品などがあります。いずれも平安時代のもです。

土製玉類は土で作られた装飾品と考えられるものです。

羽口は、空気を送るための粘土でつくった管状の製品のことをいいます。本来は、主に製鉄炉や鍛冶炉などに装着して、ふいごとセットで使われる製品ですが、野木遺跡から見つかった羽口のほとんどは、カマドのそでの芯材として使われたものであり、炉の操業で使わなくなった羽口を再利用したものと考えられます。羽口の断面の形にはバリエーションがあり、カマボコ形、円形、四角形、円形の底部を少しだけ面取りしたような形があります。

支脚は、カマドに据えられた土器を下で支えるための製品です。筒状のものや、四角形の粘土塊などがあります。

また、一軒の竪穴式住居跡のカマドの周辺から、断面が楕円形をした、長さ50cmほどの筒状の土製品がみつかりました。土師器の甕のような器壁をしており、粘土紐のつなぎ目がはっきりと残っています。何のために使ったのかは不明です。



羽口と支脚



用途不明の土製品

鉄製品

鉄をつくるための炉をもっていた野木遺跡の人々は、自分たちの集落で鉄をつくり、それを材料としていろいろな種類の鉄製品をつくって使っていました。それらの鉄製品には、直刀、刀子、鎌先、鋤先、斧、紡錘車などがあります。鉄製品には、炭素量の高い鉄を溶かし、それを型に流し込んで作る鑄造鉄器と、鉄を炉で加熱し、打ち鍛えて、整形して作る鋼製鉄器があります。

野木遺跡で見つかった鉄製品は、すべて鋼製鉄器であると考えられます。刀子、鎌先、鋤先、斧、紡錘車などは日常的な道具として考えられますが、直刀は限られた人が所持できる特別な道具であったと考えられます。



鉄製品

石製品

調査で見つかった石製品には、平安時代の砥石、縄文時代の磨石、台石などがあります。

砥石は刀子、鎌先、鋤先などの鉄製の刃物類をとぐための石です。砥石を使う目的として考えられるのは、使用によって摩滅した刃先を研ぐ場合と、鍛冶の工程に伴い、鍛造してできたばかりの製品の刃先を作るために研ぐ場合とが考えられます。砥石はほとんどが竪穴式住居跡から見つかっており、住居内で使われたものと考えられます。したがって、摩滅した刃先を研ぐ場合だけでなく、鍛造した製品に刃先をつける場合も住居内に持ち込んで作業を行っていたと考えられ、製品を鍛造する鍛冶場と製品を研ぐ作業場は、分かれて存在していたと考えられます。

磨石や台石は、縄文時代から使い続けられている道具です。磨石は、ものをすりつぶしたりする道具で、台石はその台となる道具です。



砥石

まとめ

青森市教育委員会では、青森中核工業団地造成事業に先立ち今年度、新町野遺跡、野木遺跡の二遺跡について発掘調査を実施しました。

新町野遺跡は、標高 20m ~ 40m の丘陵地上に縄文時代の竪穴式住居跡、陥し穴、フラスコ状土坑、平安時代の竪穴式住居跡、土坑、お墓の可能性が高い円形周溝などが見つかりました。

なかでも平安時代の円形周溝は、それ以前に作られ、廃絶された竪穴式住居跡の上に作られている例も見つかっていることから、ある時期に集落として営まれた後、墓地として利用された可能性を持ち得ています。

円形周溝が作られる以前の竪穴式住居跡は、カマドが北側を向いているものが多く、また 10 世紀初頭に降下した 2 種類の火山灰が住居内の堆積土中に自然に積もった状態で見つかる例があることから、青森市南部においては比較的古い時期に作られた集落の住居であることが考えられます。

野木遺跡は、標高 50m ~ 90m の丘陵上に縄文時代の竪穴式住居跡、陥し穴、フラスコ状土坑、平安時代の竪穴式住居跡、土坑、鉄生産関連遺構などが見つかりました。

昨年度に調査を実施した地区から青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した地区との間を調査することになりましたが、平安時代については、ほぼ昨年度の調査区と同様の住居の配置状況で集落が営まれていたことがわかりました。

昨年度の調査で可能性が想定された鉄生産に関する遺構についても、今年度 5 基見つかри、平安時代の人々の生活のなかでの鉄づくりについて検討できる情報を得ることができました。

新町野遺跡と野木遺跡は、地形的に見た場合、ほぼ一つの丘陵上にある遺跡であり、青森県埋蔵文化財調査センターが実施した調査地区とあわせて約 17 万 m² を超える発掘調査が実施されたことになりました。全国的に見てもこのように広い面積を発掘調査した例は少なく、縄文時代と平安時代の当時の人々の生活の営みを知る上で貴重な情報を得ることができました。

今年度で、青森市教育委員会が実施した青森中核工業団地造成事業に先立つ発掘調査については終了しました。



発掘調査作業風景

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
"	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
"	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
"	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
"	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
"	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
"	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
"	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財	1983		『山野峠遺跡』
"	1985		『長森遺跡発掘調査報告書』
"	1986		『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
"	1987		『横内城跡発掘調査報告書』
"	1988		『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
"	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
"	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
"	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
"	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
"	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
"	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
"	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
"	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
"	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
"	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
"	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
"	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
"	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』

報告書抄録

ふりがな	しんまちの のぎ いせき はくつちょうさがいほう		
書名	新町野・野木遺跡発掘調査概報		
副書名			
巻次			
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第46集		
編著者名	北林八洲晴、木村淳一、設楽政健		
編集機関	青森市教育委員会		
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111		
発行年月日	西暦 1999年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんまちの 新町野	あおもりし おおあざ 青森市大字 ごうしざわ あざまつもり 合子沢字松森	02201	161	40°	140°	19980701	23,800	工業団地造成 (青森中核工 業団地造成工 事)に伴う事 前調査
				46	45	~		
				49	7	19981120		
のぎ 野木	あおもりし おおあざ 青森市大字 のぎ あざ やまくち 野木字山口	02201	210	40°	140°	19980420	45,900	
				50	45	~		
				38	15	19981106		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新町野	集落跡域	縄文・平安	円形周溝 縦穴式住居跡 土坑		11基 24軒 82基		縄石土須鉄土 文士 師恵製 器器器器	
野木	集落跡	縄文・平安	縦穴式住居跡 縦穴遺構 土坑 鉄生産関連遺構		114軒 14基 171基 5基			

青森市埋蔵文化財調査報告書 第46集

新町野・野木遺跡発掘調査概報

発行年月日 平成11年3月31日

発行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 0177-34-1111

印刷 第一印刷株式会社

〒030-0003 青森市石江江渡3-1

TEL 0177-82-2333